

都道府県別賞一等

目には見えない優しさ

大阪府 大阪市立大正東中学校 二年生

友寄 結芽

小学校の卒業式の前日、

「おばあちゃんが亡くなった。」

と父がつぶやいた瞬間、家の中が静まり返り、胸がギュツとしめ付けられました。祖母と最後に会ったのは、亡くなる二カ月前でした。以前の元気な姿とは違い、やせ細っていて、足元がふらついていました。沖縄の祖母の家は遠く、突然の知らせは現実だと思えませんでした。気持ちの整理がつかないまま卒業式を終え、家族みんなで祖母のもとへ急いで向かいました。祖母との思い出を振り返る中で、もっとたくさん話して、ありがとう、大好きだよと伝えればよかったと後悔の気持ちは何度も頭の中を巡りました。静かに横たわる祖母を目の当たりにし、動揺する気持ちをぐっとこらえながら心の中で『今までありがとう。』と伝えました。私はその日、命の重さを感じました。祖母はガンで、自宅で家族に見守られながら静かに旅立ったそうです。訪問看護の方々を支えられ、祖母や家族が望んでいた自宅でおだやかな最期を迎えるということができたのは、生命保険の給付金のおかげだと聞いて、とても驚きました。もし生命保険に入っていなかったら、祖母は望んでいたような最期を迎えることはできなかったかもしれません。

それから数カ月後、妊娠中の母が合併症で入院することになりました。私は怖くて、詳しいことまでは聞くことができませんでした。たった五日間でしたが、不安でとても長く感じました。母と連絡を取り合いながら、父や弟と支え合って前向きに過ごし、無事に母が帰ってきた時は心から安心し、いつもより心を込めて

「おかえり、お母さん。」

と言いました。後からこの時のことを、「保険のおかげで入院費の心配をせずに、お腹の赤ちゃんのことを守ることができた。本当にありがたかった。」と母が話してくれました。

その後、元気な赤ちゃんが生まれ、今では赤ちゃんの笑い声や泣き声が家の中に響き、家族の笑顔があふれています。祖母との別れ、母の入院、そして新しい命との出会い。私は短い期間に、命の大切さと家族の支え合いを深く感じました。

第63回中学生作文コンクール

そして、生命保険の本当の意味を知りました。正直に言うと、これまでは保険は難しくて、自分にはまだ関係のないものだと思っていました。でも今は違います。私や家族を目には見えない優しさでそつと支えてくれていたことに気付いたのです。

生命保険は、お金の備えだけでなく、大切な人や自分自身を守るための安心の贈り物でもあると感じました。それは私の家族だけでなく、病気や災害などの不安に備える多くの人々の今と未来に寄り添ってくれているのです。私もいつか、自分の家族ができた時には、生命保険のことをしっかり考え、大切な人を守りたいです。そして今は、思いやりのある行動で誰かをそつと支え、目には見えない優しさを届けられる人でありたいです。